

令和6年度第1回函館市政策アドバイザー意見交換会 会議録

1 日 時 令和6年(2024年)8月8日(木) 15:00~17:30

2 場 所 函館国際ホテル2階「白鳳」

3 発言内容

市長挨拶・市政運営説明

大泉市長

- ・国内外で活躍されている皆様が函館市のために政策アドバイザーを引き受けていただき、またご多用にも関わらず、この意見交換会に参加いただいたことに厚く御礼を申し上げます。
- ・今年は函館が全国から注目を集める幸運な年である。劇場版名探偵コナン、将棋の王位戦、客船の寄港回数も過去最高、さらにホテル建設の話題もいくつも出ている。
- ・しかし、こうした一見賑やかに見える状況がこのまちの抱える重い病を見えづらく、わかりにくくしている。
- ・函館は今、間違いなく大きな危機を迎えている。本年3月現在で23万8,213人の人口が、2040年になると18万3,000人、2060年に11万9,000人となる見通しである。中核市のうち函館市と同程度の人口規模の都市で比較すると、2020年から2050年までの人口減少は函館が最悪レベルである。
- ・人口減少で行政サービスの縮小やバスの便が減る、買い物が不便になるなどのイメージを持つ方が多いと思うが、函館のように、なまじ24万の人口が集積しているからこそ恐れるべきことがある。それは治安の悪化である。人口が減少し、経済が縮小し、子どもの貧困も深刻化していく。そのことによって非行や犯罪に繋がる可能性が大いにあると思う。何より、空き家が急増することにより火災の要因、犯罪の温床にもなりうる。一方、その時に頼りにすべき警察や消防の機能は人口減少に伴って縮小せざるを得ない。こうなれば、人口流出にさらに拍車がかかり、誰もその止め方を知らない。まだ誰も直面したことのない問題だから。
- ・もしかするとそこまでひどくならないかもしれない。ただ、ここが分かれ道である。たぶん大丈夫だと言いつつ聞かせ、これまでのように難しい挑戦をしない。そういう道もあるかもしれないが、私はあえて困難な挑戦を選んだ。
- ・なぜか。それは、そうしてきたからである。函館のまちはいつもそうしてきた。明治から昭和の初め頃まで、函館は何度も大火に見舞われたが、そのたびに市民が力を合わせて、立ち向かい復興してきた。挑戦するもう一つの理由はチャンスがあるからである。確かにこれだけ高速な人口減少を止める、この負の連鎖を止めるのは非常に難しいことだが、函館にはそれを乗り越えるための武器、魅力や強みが十分にあると思っている。諦めるのはまだ早い。若い人たちに選んでもらえるまちにならないといけない。
- ・若い人たちが、このまちで家族を作ろう、ここで母になろう、そういう決心をするには大変な覚悟がいると思う。その背中を押してあげられるように、このまちが守ってくれる、この地域が温かく見守ってくれる、そう感じてもらえるような温かく

寄り添う行政を進めなければならない。

- ・本日は地域の外側から客観的に当市を見つめていただく中で、これまで私どもが持ち合わせていなかった着眼点や発想，多くの人から選ばれるまちになるためのヒントやアドバイスなどを伺えればと思っている。

意見交換

飯村 亜紀子 氏

- ・函館は、五稜郭とその歴史、函館山の夜景、温泉、新鮮な海産物など豊かな魅力がある。空港からのアクセス、新幹線などインフラが強い。クルーズ船も大きく経済に貢献しているのではないか。医療や教育の場にも恵まれていると思う。
- ・キーワードである「選ばれる」ということを考えてみると、外の人に選ばれることと、函館の人が住み続けることを選ぶことという2つの面があるのではないか。外の人から選ばれるには魅力と強みを生かすこと。教育の機会があること、仕事があること、子どもを育てられることが函館の人に選ばれることだと思う。
- ・函館の現状で特に衝撃的だったのは出生数が千人を切っていることである。しかし、千人だからこそ手厚く子育てを支援することも可能ではないか。
- ・10代、20代の男女、合わせて毎年600人から800人の方が、大学進学や就職のため転出している。チャンスがあれば函館に戻ってくる、選ぶことができるまちづくりをぜひ目指していただきたい。
- ・付加価値のある観光を提供してほしいという話も聞いた。函館だけではなく、道南や北海道の他の拠点を結び付けて訪れることができれば、広域の魅力をさらに高めることにもつながる。
- ・道南は再生可能エネルギーの資源が大変多くある。コンブの産地でもあるので海洋バイオマスにも強いのではないか。
- ・こういったものをさらに生産性を効率化する、繋いでいくという意味で、デジタルやITが有効だと思う。はこだて未来大学もあり、データを自分たちの手元に置いてビジネスをする現場が函館にはあるのではないか。
- ・観光、再生可能エネルギー、デジタル、ITに力を入れて仕事を作っていく、そして暮らし続けられるようにぜひご尽力いただきたい。

伊藤 隆敏 氏

- ・子育て世代にとって現金給付はあまり役に立たないと言われている。1人あたりの子どもにかかる教育費など、質の向上にお金を使うので、出生率の向上には繋がらないという研究がある。それよりはサービス給付、保育所、学童保育、幼稚園等の充実、給食の無料化などで効果が上がった例がある。
- ・子育て世帯は、英語、IT、プログラミング教育をなるべく早いうちからやらせたいと考えている。したがって、なるべく早い時期から英語をできるようにしたり、小学校で英語のネイティブスピーカーの教員を設置基準よりもっと増やすように自治体で補助を出したりということは、子どもの数を増やすインセンティブになる。
- ・財源の問題が必ず出てくるが、ホテル税、入湯税、ふるさと納税、インバウンドの

利用者等から収入を得る方法があり、また、喜んで払ってもらえるような付加価値のついた高額なサービスを提供することが重要である。

- ・高齢者にとっても魅力のあるまちをつくることも重要である。病院，図書館，市役所，出張所などがある固まった地域に作り，そこに移ってきてもらうコンパクトシティという考え方がある。魅力のあるサービスやインセンティブをつけてコンパクトに住んでもらう。雪や雨に濡れずに移動できるものを作るなどは画期的で，コンパクトシティを成功させればおそらく全国的にも注目される。
- ・高齢者は健康な人も多い。高齢者が子育て世代の支援になるような仕組みづくりは非常に重要で，高齢者と子育て世代のつながりが出てくる。
- ・若者にとって魅力のあるまちという点では，大学やその周りのコミュニティを作ることが重要である。はこだて未来大学，北大水産学部は非常に可能性がある。IT人材，外国人留学生の定員を増やし，コミュニティとして成り立つようなものにしていく。はこだて未来大学は外国人留学生の比率が非常に低いようなので，英語で教える授業を充実して，外国人留学生を増やし，コミュニティに若者が増えることを目指すことは非常に可能性がある。
- ・今，水産資源がどんどん減っているという問題があり，陸上養殖も含め完全養殖，例えば，イカの完全養殖などを手がけていけば，函館の魅力づくりにも貢献できるのではないかと。
- ・やがて企業誘致にも繋がり，仕事を提供することにつながる。例えば，ITであればラピダスとの提携も考えられると思うので，大学の魅力を高める，定員を広げる，若者を増やすことに注力していただきたい。

伊藤 正裕 氏

- ・この夏休みは家族と函館で過ごしたが非常に過ごしやすかった。気象的にもそうだが，まちの混雑具合，美しさ，風光明媚なところ，資源の豊かさは極めて普遍的な価値だと思う。人口減少が進んでも，おそらく気象も変わっていくので，実は函館にとって追い風になるのではないかと感じている。
- ・どこでも働ける時代になってきているので，住む環境さえ整備されれば人は選んで住んでくれると思う。頭脳労働者を誘致する政策をしてもよいのではないかと。
- ・函館の強みは空港である。通勤の時間帯を狙った増便，LCCの誘致で安く東京と行き来できるようにするなどが考えられる。頭脳労働者等のどこでも働くことができる人が住みやすいまちを作り，優遇し，さらには新幹線と飛行機によるアクセスを良くして行き来が出来るようにするとよいのではないかと。そのような労働者は高所得者が多く，それだけの税収も見込めるのではないかと。
- ・どこでも働くことができる職業には投資家もある。今，海外も含めて資産を増やしているのがファミリーオフィスである。積極的に誘致しているところは日本にないと思う。ファミリーオフィスは場所に根付いてしまえば次の世代へと繋がっていく。富裕層または超富裕層であるので，様々な人や会社が一緒に付いてくる。転入者を増やすことも出来る。
- ・市のレベルの話ではないが，例えば，特区を作ってファミリーオフィスが一定以上

の投資を地元にとすると、相続税を数年間免除する政策をすれば莫大な資本が函館に集まるのではないか。

- ・国際プライベートジェットの発着枠を増やすなどすると、別荘を作ろうとする人が出てくるかもしれないので、まずは税収を増やすことを考えてはどうか。

大西 雅之 氏

- ・函館観光の課題として、湯の川温泉がかつての状況ではなくなっていることが挙げられる。函館空港に近く、利便性も最高でよい温泉なのだが、温泉が中央部のホテルにもできてしまったため、湯の川温泉に泊まる必然性が薄れたことと、個人旅行化に向けて、旅館個々の魅力から湯の川温泉郷の魅力に変わっていかねばならないのだが、まだ団体旅行が多かった頃の名残が残っている。湯の川が温泉郷としての魅力を作らなければ、便利な中央のホテルと競っていけないのではないか。
- ・もう一つの課題としては、函館オンリーであることが挙げられる。函館は集客力があるが、それが道南エリアに及んでいない。函館市の周辺をしっかりと育てないとリピーターが続かず、次のエリアに移ってしまう。大沼、江差、松前などの魅力をネットワークにしていく。それを具体的に函館市の強力なリーダーシップで、道南エリアの観光ビジョンを魅力的にしていく必要がある。
- ・函館観光を考えたときに北東北との連携、札幌圏との連携、南北海道でまとめた魅力を作る、この3つが重要だが、今は道南エリアが核として広がっていくことが欠落している。函館とグレーター函館をいかに魅力的にするかに取り組むべきではないか。
- ・有識者の方から、新幹線を東京から考えるのではなく、札幌や新千歳空港からどう各エリアに伸ばしていくかという話を聞いた。札幌と函館を新幹線で結ぶのは的を射ている。

隈 研吾 氏

- ・観光地としての函館はポテンシャルを持っていて、世界ブランドになれる場所だ。海岸線、地形の面白さ、歴史、自然も含めて十分世界ブランドになり得る一方、あまり新しいことが起きてない観光地という感じがする。観光客は情報に敏感なので、新しいことが起きてない観光地は、ちょっとしたきっかけで魅力がどんどん下がっていく可能性がある。
- ・私が函館とヨーロッパの都市でいつも比較して考えるのはバルセロナだ。バルセロナは、新しいイメージをどんどん与えている。特に、そのきっかけとなったのは、80年代のバルセロナオリンピックで、それまでの古いバルセロナのイメージを一新するようなブームを起こした。オリンピックの後も、世界の市場でも他に例がない、市場の定義が変わるようなものをバルセロナの中に作った。函館でもバルセロナのようなことが起こったら、観光地としての質が変わるのではないか。単に集客人数が急に増えるのではなくて、質が変わって見方が変わることが重要ではないか。
- ・観光以外の面でも、見た目にインパクトのあるものがあると非常に訴求力が出る。空間的にインパクトのある福祉施設ができると、年を取ったら住んでみたいと思わ

せることができる。インパクトのあるものを通じて、行政の力の入れている部分をビジュアル的に見せるような仕掛けがあってもよいのではないか。世界の様々な都市を見て回って仕事をし、行政が力を入れているものがビジュアライズされていることが非常に効果的だということがわかり、グレーター函館も含めて、函館も元々ものすごくポテンシャルを持っていて、そのイメージが劣化しないで更新するためには、このようなやり方が非常に効果的なのではないか。

塚原 月子 氏

- ・人口の自然増ということで考えると、比較的若い女性の定住が必要だと思う。函館市では、男女ともに転出超過が16歳から44歳まで続き、5年・10年でUターンしていない。大学進学、就職を機に出ていった若者が基本的に戻ってきていない。さらに女性はその度合いが強い点を解消していく必要があると思う。函館を出て戻ってこない若者の中でも女性の声を聞き、函館に住み続けたり戻ってくるのが女性が男性以上にできない原因を突き止める必要がある。
- ・経済構造に起因するものとソフトの要因とがあると思う。経済構造に起因する要因は財政的な措置も必要だと思うが、ソフトの要因は場合によっては経営層のマインドセットチェンジを図ることで、比較的解決できる部分もあるかもしれない。
- ・職場におけるジェンダーギャップとしては、正規・非正規、両方の就業の機会の違い、職場で自分自身の成長ややりがいを持って貢献できる機会が男女で違いがある可能性、柔軟な働き方、賃金のギャップ、風土、女性に対して無意識の偏見と言われるようなことがないかどうかを検証していく必要がある。
- ・世代間ギャップなど若い女性・男性に共通して問題視されている可能性があると思う。若手が成長でき活躍できると思えるような職場かどうか。これはまず市役所でヒアリングするのも手近なこととして出来るのではないか。
- ・若者、特に女性が流出してしまう原因のひとつに家庭生活におけるジェンダーギャップがある。家庭の中での就業の担い手が誰なのか。正規・非正規などを合わせてしっかり見ていく必要がある。家事・育児・介護に係る実際の負担、男女の固定観念なども見ていく必要がある。
- ・地域活動の中で男女の固定観念や教育など社会生活におけるジェンダーギャップもある。大学等教育機会における女性の率も見て、女性に魅力的なことに取り組むこともできる。
- ・家庭や社会生活に関しても、若い女性、男性に共通して問題視されている可能性がある。
- ・次世代を育てやすい環境かどうか。函館市の合計特殊出生率は低いですが、豊岡市のように若い女性が回帰してくれないことが原因だと気づき、取り組んだ事例もある。本当に取り組むべき課題が何かを考える必要がある。
- ・若い人の心の拠り所にできる、あるいは誇りに思えるようなバリューが函館にあるか。それが何だと謳っていくのか。市政でインクルージョンを掲げているところは少ない。どの都市とも違って日本中や世界に誇れるインクルージョンがある市が、もしかしたらバリューになり得る可能性もある。

- ・インクルージョンはマイノリティの人たちの生きづらさ、活躍のしづらさが解消されることによって、結果的にはあらゆる人が生きやすくして活躍しやすい状態を作ることである。流入人口にとって生きやすく、定着しやすく、活躍しやすくする上でインクルージョンが重要で、函館に元々縁もゆかりもないけれど、函館に来たくて来た方々を今は違和感を持って感じている市民がいなくなることにつながると思う。インクルージョン推進が函館に閉じないバリューの実現・発信に繋がるとよい。

野村 修也 氏

- ・関係人口を増やしていくことは十分可能なのではないかと思う。頻繁に函館に足を運びお金を落としていただく方々が増えていけば、今の問題を解決することができる可能性がある。
- ・ひとつの鍵として、規制をうまく改革していくことにより、他の場所では得難いものがあれば、函館に行かなければという話になる。これは国と連携していかなければならないが、規制改革は地方発の発想から始まることが多いので、アイデアを持つことが必要だ。
- ・日本中の方が函館を知っている。どこにあるかもよく知っている。函館がもつネームバリューはやはり活かしていかなければいけない。
- ・例えば、湯治という古くからあるような概念をうまく再開発して、治療のために湯の川温泉に何泊か滞在する形のコンセプトを作り出していくことが、関係人口の可能性となる。
- ・耕作放棄地がたくさんあるが、株式会社が農地を持てるようになれば、農地を持つ方々が株主になることもでき、投資をする方が関係人口を作っていくことになる。このような工夫は十分可能ではないか。
- ・函館に毎年来るイベントを作るのが非常に重要だ。市民参加型の野外劇をより洗練された、世界でも通用するレベルの劇に仕立て上げていけば、毎年リピーターとして来るようになるのではないか。また、青森ねぶたの集客力を我々にも使わせていただくような発想があってもよい。
- ・クルーズ船の対応が寂しい。若松ふ頭のクルーズターミナルは、クルーズ船の乗客しか利用できないので、充実させ市民も遊べる施設にすることもできるのではないか。また、港町ふ頭には施設がないので、うまく充実させていけば、関係人口が増えるのではないか。
- ・豪華客船を定住型のホテルに変えるような業者を後押しするなどにより、客船の中のカジノを楽しめる大型リゾートを作ることは不可能ではないと思うので、こういったようなことを発想して今あるものをうまく活用しながら出来るのではないか。
- ・北大水産学部が設置した地域水産業共創センターをうまく活用し、研究者が実験に来たり、企業が共同開発のために色々な方々が行き来したりすれば関係人口となる。
- ・大学の若者たちが地方創生を考える ISARIBI with という活動を始めているので、ぜひこの会にその方々も呼び考えを聞けるとよい。

長谷川 榮一 氏

- ・人口減を食い止めるために、現実的なアプローチが大事で、まずはビジターを増やすこと。
- ・ビジターは3種類に分けて考える。1つ目は数日あるいは1週間の滞在者。主として観光客や出張者。2つ目は数週間から1カ月の滞在者。合宿や保養、リラクゼーションに来る方々。対応するにはリラクゼーションを担う事業者が必要となる。3つ目は数か月から年の単位での滞在者であり、端的に言うと企業であり、誘致が必要となる。函館の持つ魅力は、これらの類型ごとに、異なってくる。観光を大事にする一本脚ではなく、第二の脚、第三の脚でも立つ工夫をすべきだ。
- ・函館市が目指す点を「選ばれる」函館にしたのは正鵠を射ている。市の外の人々の眼には、函館の魅力がどのように映るのかを意識することが大切。市民が考えている点と違うかもしれない。
- ・企業を誘致すると、函館に仕事を作るので、函館とビジターの遭遇率も高まるし、函館を出て言った方が戻って来る可能性も広がる。その結果、函館市民になる方も出てくる。企業活動は市財政に継続的に寄与するとの期待も高い。だが、事業所や企業を作るときに、市内で考えている魅力が、外の眼には映る魅力と必ずしも合っていないことがある点に留意すべき。
- ・市の資料によると、函館は若者の失業率のランキングが悪い。失業した若い方が事業活動、場合によっては市の仕事をサポートすることで手に技を持たないといけない。馴染みがって、ハードルの低い技、例えば自動車の運転を磨いてもらって、自分に自信をもってもらい、その技を生かして収入を得る。自分に誇りをもってくれるのではないか。人口が減っている中で、若い方が仕事を持っていないのは本当に惜しい。
- ・企業運営では、市の行政サービス処理のスピード、分かり易さも大事だ。その点では議会との関係も大事。市は、選ばれる函館市になり、人口減少食い止めに最優先課題とすることについて、先ず市議会の理解を得る、その上で、その目的のためことであれば、議員からの意見で個別の行政処理が止まることのないようにして、事務処理速度を緩めない。場合によると、「その点は宿題にさせてください」と議員に断った上で、先に進めさせてもらう。
- ・人口対策上は、女性の視点が不可避。東京へ流出する女性の数が多い市は、名古屋や仙台などといった地方の大都市。そこでは、女性の役割として、従来と変わらずに、マイナーなものを与えられることが多く、女性が不満を感じているからかもしれない。女性が型にとらわれない活躍をできる市として函館市が大々的に模範となれば、素晴らしいインパクトをもつのではないか。
- ・函館市の歴史が長く、施設も揃っているので、近隣の市町村と一体として、振興策を展開した方が上手くいくのではないか。
- ・最後に、動物が振興策でカギを握る可能性がある点を申し上げたい。前に進めてくれる動物と、後ろへ引っ張ってしまう動物だ。前者はペット。ペットを伴った訪問ができる環境を整えば、ビジターはもっと増えるのではないか。

丸谷 智保 氏

- ・市の資料には非常に危惧する数値がたくさん並んでいる一方、我々の店舗数がこの20年で2倍になったり、売上が2.75倍になったり、あるいは取引金額が増えている事実もある。なので、ポテンシャルがあることに自信をもっていい。観光だけではなく、産業面でも活かしていけば、まだまだ可能性は十分残っていて、そういう技術もあることをお伝えしたい。
- ・函館の人は、遠洋漁業がとても盛んな頃の何十年も昔の景気が良かった時代と比べる癖がある。そこは1回払拭して、今ある財産や、魅力を再度掘り起こし認識して、思っている以上に実は評価されているというところを1回スタート地点にして、これからやるべきことを考えていくべきだ。
- ・函館には港街というキーワードを感じる。水産加工業は北海道の中ではかなり主要な位置を占めているし、造船業では、この円安の中で函館どつくは非常に受注が多いと聞いている。そういった培われた技術は大変貴重なものだと思う。船に関しては、非常に奥の深い業種であるので、その中で培われている技術は、実は函館にまだまだあると思う。魅力ある産業があれば若い人も集まる、あるいは定着するのではないか。
- ・広域的な観光の考え方にも繋がるが、「マグロ女子会」という団体が青森との交流をしている。足下でできることから淡々とやっていくひとつの例ではないか。
- ・昨日、小樽で開催された経済同友会の支部部会では、水産加工業、食品加工業、そして介護、病院など内需型が厳しい一方、観光、寿司屋、土産物屋などの外需型は良いとの話があった。やはり足下を固めた上で外需を受け入れるのがもっともプラスだ。
- ・観光要素だけではなく、貨物便としての空港の使い方があるのではないか。
- ・関係人口を増やす中で1人2人と住民票上の人口を増やしていくような政策が、足下としてはとても良いのではないか。関係人口が増えてくると、函館はただ夜景が綺麗なだけではなく、住んでみてとても過ごしやすいこともどんどんわかっていく。
- ・若い人は結構起業をしており、1社の立ち上げが成功すると別な会社を同じ人が4つ位立ち上げる。経営者が別な会社を運営する、このようなことを函館に呼び込める魅力発信もとても大事だし、函館にはそういう力があると思っている。

山崎 史郎 氏 (欠席のためメッセージを佐藤副市長が代読)

- ・中核市ランキング調査では、健康、仕事、生活、教育、社会、文化の各指標は、ごく一部を除き、厳しいものである。一方、地域ブランドとしての魅力度や観光、食の分野での関心の高さは、ずば抜けていた。
- ・そこで、都市としての競争力を高める戦略としては、函館市と周辺地域も含めた歴史遺産や自然環境、豊富な食材を活用した観光食分野は重要な柱となると考える。これは、他の政策アドバイザーの方々も同意見ではないかと思うので、様々なアイディアを俎上に乗せ、幅広い議論が行われることを期待する。
- ・一方、観光食分野のみに特化した戦略では、経済社会の変動（コロナも含めて）に左右される面が強く、雇用、賃金の安定性や広がりには限界がある。従って、函館市

の安定的、持続的な発展のためには、少なくとも、もうひとつ戦略の柱が必要だ。それは健康、福祉、子育て分野ではないかと考える。

- ・今後、詳しい検討が必要だが、函館市は、現状においても、医療、福祉、子育てサービスでは、一定の水準が確保されていると理解している。この分野がさらに発展するならば、函館市民の雇用安定にも繋がるし（医療、福祉は函館市の産業別事業者割合で第1位）、函館市および周辺地域の高齢化ニーズに対応できる人口の面でも、プラス効果が期待できる。
- ・ただし、この分野は、函館市の財政負担力や人材確保といった課題が存在しているので、総合的かつ中長期的な視点からの検討が重要だ。他の地域より優れた魅力ある医療、福祉、子育て環境をつくることによって、函館市民の生活の向上はもちろんのこと、東京圏、さらには海外からの人口流入、定着の流れが、また優秀な医療福祉人材の流れが創出されるならば、大きな相乗効果をもたらすことが期待される。

フリーディスカッション

伊藤 隆敏 氏

- ・新幹線の話だが、東京から来て新函館北斗で乗り換えるのは何かもったいない感じがする。大泉市長が提唱された函館駅乗り入れをどうすればできるかと考えると、国の税金や JR 北海道頼みだと限界がある、例えば、新函館北斗と函館間の新幹線規格のインフラを作って民間と市で保有し、その上を JR 北海道の新幹線が走り、利用料を徴収するような上下分離型がひとつ考えられる。もうひとつは、駅前の不動産開発がおそらく価値が上がるので、駅周辺の開発を一体化して考え、地代を高くとったり、デパートやホテル経営したりする。外部性を内部化する。インフラを利用することによって便益を得る人は薄く広くいるので、その薄く広く行く便益をいかに徴収するか、喜んで払ってもらおうかということを生懸命考えることが重要だ。これは東京の施設は上手なので、小田急や京王電鉄や東急電鉄と話をするとよい。不動産開発も入ってくるだろうが、そういったことを考えて実現の道筋を作るというのが現実的に早い。

大西 雅之 氏

- ・高度成長の頃に、受けたくないお客様が4種類あった。1つ目がひとり旅。2つ目が個人で来られる外国人のお客様。3つ目がペットを連れてお客様。4つ目が長く泊まるお客様。実は今、最も着目しているのがこの4つである。函館はこの4つにどう取り組んでいくとよいかを考えていた。先ほど長谷川さんから引っ張ってくるものはペットだというお話があった。飛行機はペットをなかなか運んでくれないが、新幹線は運べると思った。首都圏から北海道までだと4時間を超え、非常に長いという不満があったが、もしペットと動けるのであれば、間違いなく函館まで来ると思う。函館市や道南の観光地がペットのために取り組んだら、かなりの顧客層を引っ張って来られるのではないか。
- ・函館はインバウンドに弱い。今、函館のエリアのインバウンドは全国平均からすると約3分の1だと思う。

- ・例えば、中国の映画のロケ地となった道東地域は一举にアジア圏のお客が増えた。沖縄へプロモーションの研修に行ったときも、「大西さん、100のプロモーションより1本の映画だよ」と言われた。本日の話だと、名探偵コナンの外国語版が実現すると、インバウンドが増えるのではないかな。

伊藤 正裕 氏

- ・この先10年市政をするうえで、何が最も経済効果および市民の方にとって充実するのかと考えたときに、極めて重要なのは人と会社の転入だと思う。会社の誘致では、例えば福岡には大企業の開発拠点があり、基本的にリモートと福岡市内のオフィスで経営しており、この北海道バージョンが出来る。函館にしかないところを活かし、巨大な労働力を必要としない頭脳労働や付加価値のある産業を誘致すべきだ。そのときに、市としてどのような支援ができるか、ここから伸びる産業の色々な受け皿支援をされたらどうか。例えば、AI、宇宙、ロボティクスなど、全国の中でも尖った産業誘致をしてもよいのではないかな。
- ・気象変動により数十万から数百万人は東京に住めないと思っている。若い人は北海道に住む夢を持っているが仕事がないと何度も相談を受けたことがある。受け皿があって、東京から引っ越したい、所得がある人の転入者を増やす。会社の研究所ごと持ってくるなど、気象変動をうまく利用してほしい。
- ・子育て世代にとっては学校が課題になる。子育て世帯が非常に豊かに暮らせる支援をすればものすごく潤ってくる、循環する経済になると思う。改めてだが、観光に過信はせず、地道な基礎体力づくりも重要ではないかな。

塚原 月子 氏

- ・今後の進め方だが、本日出た話全てを同じ重みで進めていくのは極めて難しいと思うので、取るところと捨てることを決めていく必要がある。そのためにも、ありたい姿を明確に持たないといけない。ありたい姿の議論をこの会でやってよいのか、市民の皆様を巻き込んでやっていかなくてよいのか、重要だと思った。
- ・政策アドバイザー就任は非常に光栄だが、ここが既得権益になってもいけないと思っており、取るところや捨てることを決めて、取るところに強い人に残っていただいて、もっと必要な人がいればまたリクルートするなど、柔軟性がこの意見交換会にもあってもよいと思っている。

飯村 亜紀子 氏

- ・今後の進め方に関してだが、ひとつは年代別、男女別、誰をターゲットにするかという分析を進めて、何をするかというのを具体的にした方がよいと思う。
- ・こうした分析に加えて、今日挙げられたような様々なアイデアを組み合わせる機会を作るとよいのではないかなと思った。

野村 修也 氏

- ・まちのことを考えて運動している若者たちが、どういう未来を理想としているのか

確認したいと思っている。

- ・函館に来てもらう人，函館の関係人口になってもらう人，函館に定住したいと思う人などが，どのような函館だったら魅力的かをリサーチした方が良い気がする。思いつきよりは，多くの方々の意見がある程度集約できるような形で進めてほしい。

市長終わりの挨拶

大泉市長

- ・貴重な意見をいただき感激をしている。幅広く様々なご提言をいただいたが，それがいくつかの共通の像を結ぶ場になったと思う。
- ・函館の多くの方が北洋漁業時代と比べて景気悪いと言い続け，諦めてしまっているという指摘があった。函館には強みがあると今日気づかせていただいた。是非参考にしていきたい。ターゲットごと異なるアプローチをする方法論についても提言をいただいた。しっかり考えなければならない。
- ・また，リサーチし，分析し，そして選ぶ側の人の立場に立って検討し，行動すべきということも共通の意見だった。関係人口，ファンを増やしていく。それがやがて定住につながっていく可能性についても多くの方からご意見をいただいた。
- ・グレーター函館というキーワードが何度か出てきた。非常に重要だと思っている。当市はこれまで近隣の市町村と連携することが下手だった。「面倒見の悪い兄貴分」と言われた時代が長かった。それをまず払拭し，大きな力に変えていくことは私も常々考えてきたことであり，意を強くした。
- ・バリューという言葉も出た。函館が追い求めるものが何なのか，函館が何らかの価値を体現する。それをこれから探していく。この会議の中で，そして広く市民の声を聞きながら函館のバリューを作り出していかなければならない。
- ・函館ではまず今年度，活性化総合戦略を策定する。来年度は経済振興のためのビジョンを作る。今日いただいた意見に加え，今後も提言をいただきながら，それらの計画に活かし，まちづくりを進めていきたい。次回会議に向けて色々と助言をいただきたい。本日は誠にありがとうございました。